

グイ・ブッシュマンにおける儀礼と治療

今 村 薫

I はじめに

グイ・ブッシュマン⁽¹⁾は、アフリカ南部のカラハリ砂漠にすむ狩猟採集民である。彼らの儀礼体系は未発達であり、初潮儀礼と結婚式をのぞいては儀礼らしいものはないと報告されてきた(Silberbauer, 1963; 田中, 1971)。私も調査を始めた最初の1年間は、女性たちが集まってダンスを踊る初潮儀礼以外には儀礼らしいものには出会わず、先人の研究を確認するだけだった。ところが、2回目の調査ではじめて結婚の儀礼を目にする機会に恵まれ、自分が儀礼一般についての固定観念にとらわれていることに気づいた。そして、これをきっかけに儀礼の収集と儀礼体系の研究に着手することになった。

1991年1月、調査助手として雇っていたグイの青年が結婚に漕ぎ着け、明朝、結婚式をおこなうと私に伝えた。当日の朝6時前に調査助手が呼びに来たので、私はビデオと写真機を持って花嫁のいるキャンプまで駆けつけた。大勢の参列者を予想していた私は、会場である小屋に着いたとたんいささか拍子抜けした。花婿である調査助手と花嫁と、花嫁のお婆の合わせて3人の他に、野次馬の大人が2人居ただけだったからだ。まもなく、お婆は、おもむろに剃刀を手にとって新郎新婦の身体の数カ所に小さな傷を付けはじめた。新郎新婦の家族や友人が加わるわけでもなければ、歌や踊りが踊られるわけでもなく、実に淡々として静かな朝が過ぎていった。もし、私が結婚式がおこなわれていることを知らずにこの小屋に近づいたとしたら、まったく気づかずに通り過ぎたであろうと思われた。

グイ語で儀礼のことを「ツォー (tsôo)」という。ツォーとは本来「治療」

や「薬」を意味する言葉である。彼らにとって儀礼とは治療行為の一部なのである。彼らの結婚式も、結婚によって被る身体的な不調を治すための治療という実用的な比重が大きい。彼らの儀礼はパフォーマンス的要素が極端に少ないので、異文化からの観察者には見えにくい。

グイ・ブッシュマンの儀礼研究がこれまで周知的であったのは、このような「見えにくさ」にくわえ、彼らの儀礼が近隣の農牧民であるカラハリ族の影響を受けていると考えられてきたからであった。たとえば、グイ・ブッシュマンの研究を長年精力的に続けている菅原は、以下のように述べている。「現在サン（ブッシュマンのこと）が頼っている儀礼や呪薬のかなりの部分はサン独自のものではなく、カラハリ族との長い接触の過程でとりいれたものである可能性が高い」（菅原、1991）

本論文では第一にグイ・ブッシュマンの儀礼体系の詳細な記述をおこなう。これまでの私の調査により、誕生、成人、結婚といった人生の通過点はもちろん、狩猟での不成功や肉親の死といった不幸、また、突発的な事故や重い病気などの災厄にたいしても、彼らが儀礼をおこなっていることが明らかになってきた。第二に、儀礼の形式や儀礼で使われる薬草を比較することで、ブッシュマン起源の儀礼とカラハリ起源の儀礼とを峻別することを試みる。そのうえで、カラハリ族の影響を受けた儀礼をも含めた、現在のブッシュマンがおこなっている儀礼の全体を貫く彼らの世界観を浮かび上がらせる。さらに、災因論の民族誌間の比較から、災いの源泉と社会構造の関係について考察する。

II 調査地域の概略と調査方法

セントラル・ブッシュマン（グイとガナ）は、著しく乾燥した環境に適応した生活を営む狩猟採集民であり、その生態と社会については、田中、Silberbauer によって詳細に研究されてきた（田中、1971、1978；Tanaka、1980；Silberbauer、1963、1981）。彼らは1970年代まで自給自足的な狩猟採集生活を送っていた。しかし、ボツワナ政府の遠隔地開発計画により、1979年より

カデ地区にディーゼル・エンジン付きの井戸が整備されて定住化が始まった。

調査対象地であるカデ地区は、セントラル・カラハリ動物保護区の中央部西寄りにある。カデ地区では集住化が著しく、1990年の人口は750人を越えた(今村, 1993)。カデ地区では現在も狩猟と採集がおこなわれているが、政府から配給されるトウモロコシ粉が主食となっており、道路工事や民芸品製作から得られる現金収入にも生計を依存させるようになってきた (Osaki, 1990; Tanaka, 1987)。

本研究の資料は、1994年度および1995年度に集中的におこなった儀礼に関するインタビューがもとになっている。また、1988年度より収集してきた植物の利用方法と植物標本、1988年度より参与観察を始めた初潮儀礼に関する記録、1990年度に立ち会った結婚儀礼、食物回避に関する儀礼の観察記録なども資料に加えた。本稿で用いるグイ語の音韻表記は中川(1993)の確立した正書法にしたがった⁽²⁾。儀礼の名称などでグイ語を直訳したものはくゝでくゝった。

III 個々の儀礼の説明

1 通過儀礼

グイ社会では、誕生、成人、結婚という人生の節目において儀礼をおこなう。これらの儀礼のうち、誕生と結婚における儀礼は、ごく少人数でおこなわれ人目につかない。とくに結婚の儀礼は、序文で述べたように荘厳な儀式や盛大な披露宴とはかけ離れている。「儀礼」を指すツォーという言葉が本来「治療」を意味するように、結婚の儀礼は性交による病の実質的な治療と予防であり、親族間の結束を固めたり社会的に結婚を公認させるためのものではないからである。この儀礼を経ずに性行為をおこなうと、男性あるいは女性が激しい頭痛に襲われ、死に至ることもあると信じられている。

子どもに関する儀礼も、子どもの健康と病気予防のために内輪でおこなわれる。両親の血を子どもに入れる儀礼では、両親と子ども、それと年長者が早朝に集まり、ひっそりと執り行われる。子どもに臍の緒を探させる儀礼で

は、母親と子どもの2人でおこなう。

一方、少女を迎える初潮の儀礼では、遠方からも多数の女性が集まって来てダンスを踊り、少女を祝福する。初潮儀礼には少女自身の健やかな成長と多産を願う側面と、自然を畏敬し自然からの恵みを祈願する2つの側面がある。また、「親族には物を分け与えよ」「親族は助け合え」「隠し事はするな」など、高い共同性に根ざしたグイ社会のイデオロギーを年長者から再教育される機会でもある。

男性の成人儀礼でも彼自身の壮健と自然の慰撫を目指しているが、初潮を迎えた少女一人に対して個別におこなわれる初潮儀礼と異なり、男性の成人儀礼では10人前後の青年を一カ所に集めて集団生活をさせる。男性の成人儀礼では年長者による青年支配の場を形成している意味合いが強い。

1-1 初潮儀礼

少女が初潮を迎えると、同じキャンプの女性たちは急いで小屋を建てて少女をその小屋に隔離し、初潮儀礼が始まる。少女は頭から毛布を被り、無駄口を聞くことを許されず、およそ半月間じっと横たわっていなければならない。この間、他のキャンプの女性たちも集まってきて、少女の小屋のまわりを踊りながらまわる。この踊りはエランド・ダンスという。エランドは、カラハリ砂漠に生息する脂肪に富む大型のレイヨウ類であり、神が特別に人間に与えた動物であると考えられている。また、エランドは豊饒と多産のシンボルでもある。エランド・ダンスは一連の初潮儀礼の中で、最も華やかなクライマックスだが、初潮儀礼そのものは、完了するには1年近くを要する多数の儀礼と行動規制の連なりからなる。初潮儀礼の詳細は別稿にゆずることにし、本稿では初潮儀礼の中でも「薬草」を使う儀礼にのみ注目する。儀礼は少女のオバ⁽³⁾が中心になっておこなう。

(1) 初潮のはじまり——〈帰らせる〉

採集に出ていた少女が、初潮が始まったことに気づくとその場にうずくまる。一緒に採集に行っていた女たちが少女を寝かせ、年長者がsaasaという

植物を噛んでから唾を少女の足に吐きかける。まず、少女の足の甲に、次に足の裏に、それから経血の染み込んだ砂に唾を吐きかける。さらにその砂を灌木の根本に捨てる。こうすると、雨期になると雨が降って豊作になる。それから女性たちは、人目に触れさせないように少女を取り囲んで、彼女をキャンプまで連れて帰る。これらの行為を〈帰らせる〉という。

「saasa を噛んでから唾を吐きかける」という動作は、その後の一連の初潮儀礼において度々みられる。初潮後の最初の食事、最初の排便、最初の採集、最初の水汲みにおいて儀礼をおこなうが、これらすべての儀礼でオバは saasa を噛んでから唾を、少女、排使用の小枝、採集の掘り棒、薪、草、水場を清める枝に吐きかける。いわば「お清め」のような働きがあると考えられる。

(2) 最初の食べ物を〈食べさせる〉

キャンプに戻ってきて、別の小屋に隔離された少女は、小屋の中で初潮後初めての食事をする。この食事の前に、オバが saasa を噛んでから唾を少女に吐きかける。それからオバは少女の利き手の親指甲側をわずかに二本剃刀で切り、その傷口に〈食べ葉〉(粉にした munnam tsôo という植物と豆科の $\text{nân} \neq \text{kê}$ を混ぜた物。成長促進的作用があると考えられている) をのせて少女に食べさせる。この儀礼を〈食べさせる〉という。それから食事をするが、皿に盛られた料理の半分は必ずオバに分け、残りの半分を少女が食べる。〈食べさせる〉は最初の食事の時のみおこなうが、料理を分けるという行為は食事の度に毎回おこなう。

(3) 隔離されていた小屋から出る——〈垢をこすって小屋から出す〉

オバたちは、少女を隔離していた小屋から出す日取りを決める。満月のころが望ましいとされるので、月齢を見はからって決定する。個人によって異なるが、平均して2週間少女は小屋にこもることになる。小屋にこもっている間、毎日 $\parallel \text{nân}$ という野生スイカの種を粉にしたものを、体に付けて垢と一緒にこすり落としてきれいにする。体に付いた経血もをまぶしてこすり落

とす。

小屋から出る日の朝も、体の垢をこすって落とす。それから体の 11 カ所に剃刀で傷を付け、薬草と〈食べ薬〉を傷口に入れる。さらに、首飾りや儀礼用の帽子（かつてはスプリングボックの皮で作ったが現在はスカーフ）を身につけ、小屋から出る。これらの、朝におこなう儀礼を〈垢をこすって小屋から出す〉という。

(4) 小屋の外の光を見せる——〈顔の前で折る〉

小屋にこもっている間少女は薄暗がりの中にいるので、はじめて小屋から出ると光が目くらむ。オバがイネ科の草!k'âo で少女の視界を遮ってから、草の中心を折って少女に光を見せる。これを〈顔の前で折る〉という。少女が隔離されていた小屋から出る日は、女性たちが小屋の入り口付近に集まる。少女は若い女性に連れられて、小屋から 3 方向に歩いてみる。少女は、翌日、女性たちに連れられて人々の小屋を訪問する。訪問された人は、少女に食べ物を分けてやらなければならない。この儀礼を〈訪問させる〉という。

(5) 弓矢の儀礼

隔離されていた小屋から出た少女は、オバと一緒にキャンプに住む男性たちの弓矢を集め、弓と矢軸に | xâa-xo という薬を塗る。それから、オバと一緒に次々と矢を放つ。これが終わってから、弓矢を男性たちに返す。このように「治療」された弓矢は、特別の力を持つようになり、その後狩猟に成功するという。

(6) 親族の男性たちへの治療——〈親族の女たちがおこなう治療〉

3 回目の月経が終わると、キョウダイやイトコ、また、同じキャンプに住む男性を集めて治療をおこなう。集められる男性は、少年期から 30 歳くらいまでの独身の男性ばかりである。彼らは初潮儀礼中の少女が料理した食べ物を口にする可能性のある若者たちで、この治療を受けないと、歯痛と腹痛に苦しむことになる。男性たちの下顎と胃のところにつけた傷口に薬草を塗り、

〈食べ薬〉を食べさせる。

1-2 成人儀礼

男性の成人儀礼（|| kûi）もかつておこなわれたが、1967年頃を最後におこなわれなくなった。厳格な「女人禁制」で、居住地から離れたブッシュの中でおこなわれた。10代後半から30代前半の青～壮年の男性を10人あまり集め、年長者の定める規律のもとで集団生活をおこなった。毎年おこなわれるものではなく、雨に恵まれ野生の動植物が豊富な年にしかおこなわれなかった。強制参加ではなく、機会があっても参加しなかった人もいた⁽⁴⁾。

この儀礼は雨季の終わりにおこなわれた。日陰をつくる大木と赤々と燃やした焚き火の間に、若者たちは並んで眠る。若者たちの頭側と足側に丸太をおいて、儀礼のための空間の境界をつくった。昼は両側を年長者にはさまれた一列横隊で狩猟に出掛ける。狩猟から帰ると焚き火を飛び越えて、丸太の間の寝場所にまでもどらなければならない。寝返りをうつときも、年長者の命令に従わなければならない。菅原によると、若者たちは灌木の枝で作った鞭で背中を打たれたりしながら「人のものを侵すな。おまえが物を侵せば、おまえは殺される」といった説教を受け、「ものを見るための分別」について教わった(菅原, 1996)。また、眉間に剃刀で傷をつけられ || gâa で作られた呪薬をすりこまれた (菅原, 1995)。

儀礼の際に、超越的存在である「神」を呼び寄せるために「うなり板」を振り回して旋回音を出す(菅原, 1996)。このうなり板は | gâa で作った紡錘形の板にダチョウの脚の腱をくくりつけたものである⁽⁵⁾。

儀礼は新月から新月までの約一カ月間続いた。この集団生活を解除する日の夕暮れに、若者たちは野生スイカの種を粉にしたものを体にまぶして垢をこすりおとす。年長者がイネ科の草!k'âo で青年の視界を遮ってから、草の中心を折って青年に月光を見せる。それから、各自が自分のキャンプに帰って日常の生活を再開するが、その後さらに数カ月から数年間は、数種類の動物の肉を食べてはいけない⁽⁶⁾。

また、少年が初めての狩りに成功したときの儀礼を田中が報告している。

以下、原文のまま掲載する。

「少年が親から与えられた縄製の罾で獲物を捕らえることに成功したとき、彼の年上の親族たちは彼の上腕部や背中に小さな切り傷を何条にもつけ、何種類もの植物の汁と消し炭の粉とを混ぜ合わせた薬を塗りつけて入れ墨を行う。少年は誇らしげにこの儀式に耐え、いよいよ一人前の男の世界に仲間入りする。」(田中、1978)

この儀礼は本稿で後述する「罾猟の儀礼」に似ており、「薬」とは、|| gâa, || gôre, ≠xâri の根を黒く焼いたものではないかと推察される。

1-3 結婚の儀礼——〈血を混ぜ合う〉

1970年代までは初潮前の少女に親のすすめる「いいなずけ」がいる場合が多く、結婚の儀礼は初潮儀礼の中でおこなわれていた。初潮儀礼の〈垢をこすって小屋から出す〉ときに、少女1人ではなく少女と「いいなずけ」の2人が身体を剃刀で傷つけ、互いの血を混ぜ合ったのである。

近年は、初潮ののち数年経ってから結婚する女性が大半であり、初潮儀礼と結婚の儀礼は完全に切り離されている。結婚の儀礼において、まず、男性と女性は互いの身体の手でこすり落とす。このことを〈垢を混ぜ合う〉という。次に、身体を剃刀で切って、互いの血を混ぜ合う。それで、結婚の儀礼のことを〈血を混ぜ合う〉と表現する。また、〈血を混ぜ合う〉時に胸の傷口の血を混ぜ合うことを、とくに〈心を混ぜ合う〉といい、こうすることで男女は互いのことを深く愛するようになるという。

結婚の儀礼に臨む男女は厳粛そのものであり、強力なパワーを持つ血を混ぜ合うという行為は2人が心身ともに一体となることを目指している。結婚の儀礼を経ることによって、2人が制度的な結婚という状態へ移行したことは明らかである。しかし、この儀礼は形式的に結婚と非結婚を分けるためのものではなく、性行為という実態の後の対策として機能しているのだという点も強調しておきたい。

1-4 子どもに両親の血を入れる儀礼——〈子どもの治療〉

子どもが生後2カ月ほどたつて首がすわってくると、両親の血を子どもに入れる。この儀礼によって子どもは丈夫に育つという。

1-5 臍の緒の儀礼——〈臍の緒を掘らせる〉

グイ・ブッシュマンの出産は、かつてはブッシュの中でおこなわれた。年長の女性たちが出産を手伝い、臍の緒はブッシュにはえている *kx'oam* の枝で切った。胎盤は穴を掘ってブッシュに捨てた。母親は生まれたての赤ん坊を抱いてキャンプに戻り、産後の休養と育児は小屋でおこなった。

母親は出産後は小屋にこもり、新生児を父親も含めたすべての男性の目に触れさせない。生後3～4日で子どもの臍の緒が乾いて落ちると、*≠kan* という薬草を臍に塗り、母親は臍の緒をしまっておく。約2週間経って子どもを小屋から出す日がくると、母親は子どもの身体を洗って産毛を剃刀で剃り落とし、その産毛で子どもの臍の緒を包む。この臍の緒を、さらに皮紐で巻いて小屋の中に大切に保管する。

子どもが1歳前後になると、母親は小屋の床の砂に臍の緒をいったん埋め、それを子どもに自分で探させる。子どもが自分で掘り当てるのを確認してから、母親は臍の緒を再び袋の中にしまい込む。臍の緒は、体内で子どもと母親を結び付けていたように、子どもと小屋を結び付ける働きがあると考えられているのである。子どもに〈臍の緒を掘らせた〉その日を境に、母親は肌身離さず負ぶっていた子どもを小屋に残して採集に出かけるようになる。臍の緒が小屋にしまっている限り、臍の緒の力によって子どもは小屋に戻ることができるのである。

伝統的な遊動生活をおくっていた頃の最も危険な子どもの事故は、小屋からブッシュへ迷い出ることであった⁽⁷⁾。ブッシュで迷子になれば、肉食獣や毒蛇に殺されたり、飢えや渴き、ときには寒さで死ぬことがある。定住するようになった現在も、子どもの無事故を祈願した「お守り」として、臍の緒を大切に保管している人は多い。ところが、臍の緒は子どもが6～7歳になるころには、いつの間にか消失してしまうという。このくらいの年齢になると、

子どもは大人たちについて活発にブッシュの中を歩き回るようになり、母親は以前ほど子どものことを気にかけなくなるからである。

2 食物回避を解除するときの儀礼

グイ・ブッシュマンは動物性食物について、いくつかのタブーを持っている（田中，1971）。一つは老人しか食べられない「老人の肉」であり、もう一つは、若い女性や乳幼児の両親が肉食を避けなければならない動物である。前者の老人の肉として、センザンコウ、アフリカオオノガン、クロエリノガン、2種類のカメが菅原（1994）によって報告されている。本稿では、ゲムスボックの腸、ハーテビーストの骨髄、クーズーの骨髄を新たに老人の肉に加え、とくにクーズーの骨髄についての儀礼を記述する。

老人の肉を若い者が食べると、下痢と腹痛におそわれやせ衰えると信じられている。老人の肉を食べることは年長者の特権なのである。これらの肉を食べ始める儀礼においては、薬草や年長者の唾液や脇の下の汗が「薬」として使われる。しかし、これら薬の効果よりも、年長者が手ずから若者に肉を与えるという行為自身に意義があるようだ。

初潮を迎えるころの14～15歳の少女は、クーズーとダイカーの肉を食べてはいけないことになっている。その後16歳前後で初潮がはじまると、これら2種類の動物の肉は肉食回避の対象からはずれる。初潮を経た少女は、クーズーとダイカーについてはとくに何の儀礼もおこなわずにそれらの肉を食べ始める。しかし、今度は、ゲムスボック、スティーンボック、ハーテビースト、トビウサギ、ヤマアラシの5種類の動物の肉を食べてはいけない。これら5種類の動物の肉は「強い」あるいは「毒を持っている」とされ、初潮を迎えたばかりの大人になりきっていない少女が口にすると、激しい腹痛と食欲不振をおこすという。

肉食回避を解く順番は、獲物を得る機会や少女個人の好みによって異なるが、ゲムスボックから先に食べ始める場合が多い。ゲムスボックは短期間で回避を解いてよく、早い人では初潮を迎えて1カ月以内にゲムスボックの肉を食べ始める。他の4種類の動物は、比較的長い間肉食を回避し、少なくと

も半年から1年はこれらの肉を食べない。ゲムスボック、ステーンボック、ハーテビースト、トビウサギ、ヤマアラシの5種類の動物については、肉食を再開するときに必ず儀礼をおこなう。

これら5種類の動物の肉は、乳幼児の成長を阻害するとも考えられている。乳幼児を持つ両親は、子どもにこれらの動物の肉を食べさせないだけでなく、両親自らも肉を食べない。とくに母親は母乳から子どもに肉が伝わるので、長期にわたって厳格に肉食回避のルールを守る。母親が肉食回避を解くときは、「子どもの身体に剃刀でつけた傷口に薬をいれる」という方法をとる。一方、父親は数カ月で肉食回避を解き、儀礼の方法も「薬を含んだ父親の唾液を子どもに飲ませる」というより簡便なものである。

女性は初潮を迎えてから彼女自身のために肉食を止め、結婚して子どもを生んでからは子どものために肉食回避をおこなう。そのため、人によっては、初潮から結婚して子どもを出産し、その子が成長するまでの10年あまりも、ある動物の肉を食べ続けなければならないことがある。いずれの場合も儀礼を怠ると、ひどい腹痛、下痢に襲われてやせ衰え、最悪の場合は死に至るという。

このように、儀礼は必要不可欠なものだが、彼らは、儀礼をおこなってから肉食回避を解くのではなく、まず肉を食べてから儀礼をおこなう。これは、肉に出会う機会が偶発的で予測できないので、まず、機会をとらえて肉を食べ、その後おもむろに儀礼をおこなうと考えられる。さらに、これはグイ・ブッシュマンの儀礼全般に共通することだが、一般に考えられる儀礼と異なり、彼らの儀礼は「新しい状態に移行するための境界」として機能していない。つまり、儀礼という形式的な「けじめ」を通過した後に、肉食回避を解除するのではなく、実質的に解除してしまってから事後処理として儀礼をおこなうのである。

薬草として、|| gāa または || gōre をもちいる。その他、ヤマアラシには ≠ xāri を、トビウサギには | kōē や !nān⁽⁸⁾ を追加する。≠ xāri はヤマアラシの、| kōē と !nān はトビウサギの食物であり、それぞれの動物に関係の深い植物を薬草としている。

3 不猟に対する儀礼

彼らが伝統的におこなった猟法は、罌猟、弓矢猟、槍猟である。これらのうち、弓矢猟は現在おこなわれなくなったが、罌猟と槍猟は今日にいたるまで堅実におこなわれている。槍猟には犬を伴う場合が多い(池谷, 1989)。また、近年、馬が導入されて集団騎馬猟が盛んになっている (Osaki, 1984)。狩猟は、第一に彼ら自身が食べる肉を得るための生業活動である。また、毛皮は彼らの伝統的な衣類であり、さらに、近隣のバンツー系農牧民との交易品として重要であった。現在も、狩猟活動は肉の供給源として、また、皮から民芸品を製作販売して現金収入を得るために重要である。

不猟が続くと、儀礼をおこなう。儀礼には、〈罌猟の儀礼〉〈弓矢猟の儀礼〉〈犬の儀礼〉がある。これらは、早朝に妻が夫に施すことが多く、「まじない」的な要素が強い。儀礼の方法は、身体を剃刀で傷つけ、その傷口に薬草を塗り込むタイプと、キノコを使うタイプがある。いずれも、狩猟の対象である動物が人間を発見できなくなることによって、狩猟が成功するという。

4 病気、けが、突発的な事故に対する治療および儀礼

4-1 対症療法

腹痛、胃痛、頭痛、筋肉痛、関節痛、吹き出物などには、それぞれ症状に応じて薬草を煎じて飲んだり、傷口に塗り付けたり、薬草を煮立たせた蒸気を身体に浴びせたりする。また、胃や関節などの傷む場所を剃刀で切って瀉血させるという治療もあわせておこなわれる。傷口には、薬用植物を砕いて粉にしたものをエランドの脂肪と混ぜて塗り込む。

4-2 災いの原因——「ツォリ」と「カバー」

対症療法的に治療をおこなってもなかなか回復しない場合、人々はその病気の原因が別にあるのではないかと推察し始める。重い病気、あるいは、突発的な事故にあった本人の家族や親族が、人々とうわさ話を重ねる中で災難の原因を特定するのである。災いをもたらすものは、「ツォリ」と「カバー」に二分される⁽⁹⁾。

(1) ツオリ

ツオリ (/qx'ōri) は「よこれ」や「垢」のことである。体の表面の垢や、手のよこれなどの眼に見える物質も意味するが、血液や尿の中に潜む目に見えない物としても理解されている。性交渉、とくに婚外の性行為によって伝染するものだと考えられている。また、独身の男女であっても一方が（とくに女性が）経験をつんだ年輩である場合には、ツオリが発生するという。

性交渉によって伝染したツオリは、性行為をおこなった男女の体中に蔓延し、次にそれぞれの配偶者へ伝染する。さらに、食べ物などなんらかの方法によって、ツオリは子どもたちへも伝わると考えられている。ツオリによって、まず、幼い子どもたちが病気になる、大人も重い病にかかる。ツオリによる病は、大人に対しては頭痛、腰痛、腹痛、急激な痩せとしてあらわれ、子どもには下痢、腹痛、嘔吐、食欲不振、発育不全などの症状が見られる。これらは徐々に進行し、最悪の場合は死に至る。

ツオリによる病を防ぐために、あるいは、誰かが病気になってからの治療として、「ツオリの儀礼」がおこなわれる。ツオリの儀礼には、「尿を混ぜ合う儀礼」「くしゃみの儀礼」「汗をかく儀礼」の3種類がある⁽¹⁰⁾。これらのうち1種類だけおこなっても、3種類ともおこなってもよい。

「尿を混ぜ合う儀礼」は、血を混ぜ合う「結婚の儀礼」と手順や使われる葉草がよく似ているが、血の中に尿を混ぜる点が異なる。尿は最も「よこれている状態」であるが故に、治療のための薬になるのだという。ツオリは、人間の血液、精液、尿、汗、唾液、鼻汁、息などの体内に潜んでいる。

尿を混ぜ合う儀礼には、性関係を持った男女、および、その配偶者と子どもたちの全員が参加する。誰か（とくに小さい子ども）が病気になってからおこなうこともあるが、病気を恐れてあらかじめおこなうことも多い。性関係を持った男女にすでに子どもがいる場合は、大人たち自身の病気より、子どもが病気に冒されるのを恐れるので、この儀礼では「子どものたちへの治療」といった側面が重要になる。

関係するすべての人々が集まると、年長者が儀礼を始める。大人たち全員が1カ所に尿を溜め、皮膚を傷つけて血を流し、体内に潜んでいるツオリを

追い出す。次に、その尿と血を混ぜ合わせさらに薬用植物を混ぜると、今度はそれらが強力な「薬」に転じる。この薬を人々の傷口に塗り込む。また、大人たち全員の血と尿で、子どもたち全員にたいしても治療する。

「くしゃみの儀礼」と「汗をかく儀礼」には、性関係をもった男女とそれぞれの配偶者が参加するのが望ましいとされるが、子どもたちは参加しない。くしゃみの儀礼では、参加者が〈くしゃみ薬〉を嗅いでくしゃみを飛ばす。〈くしゃみ薬〉は、彼らの手足の爪に薬草を混ぜてつくる。くしゃみがなかなか出ないときは、それだけ病が重いという。

「汗をかく儀礼」では、儀礼のための参加者全員が、薬草を煮え立たせた湯を取り囲んで座る。身体をすっぽりと毛布で覆い、皆が薬草の蒸気を浴びて汗をかく。これらの儀礼では、くしゃみや汗とともに体内のツオリを外に出すことによって、病から回復すると考えられている。

ツオリの儀礼は、性交渉をおこなった男女の関係をそれぞれの配偶者や親族に明らかにすることに、社会的な意味がある。また、ツオリの儀礼は、婚外の性関係（いわゆる姦通）だけでなく、再婚する男女のあいだでもおこなわれる。すなわち、ツオリの儀礼は、形式的な「結婚」と「婚外」を分ける儀礼ではなく、まさしく性関係を結んだことによる身体的、社会的問題を解決するための儀礼といえよう。

(2) カバー

カバー (qhaba) の意味としては「恨み」が最も近いが、必ず親族の年長者から年少者へのみ発せられるという特徴を持つ。下の世代の親族（息子、娘や、オイ、メイ）の誰かの正しくない行為が、上の世代（父母やオジ、オバ）の人々を苦しめることによってカバーが生じ、そのカバーが息子やオイに〈入って〉、彼は重病になったり事故に遭う。正しくない行為とは、以下のものである。①親族に肉やお金を分けない。②誰もが認めない婚外性関係を続ける。③遠方へ出かけたきり消息不明になる。

カバーは恨み一般に拡張されることはなく、あくまで、親族の年長者から発せられるものに限定される。カバーによる被害として説明されるものは、

①突然の事故、②重い病気、③出産が遅れるといった障害などである。以下にカバーの具体例をあげる。

事例1 ライオンが小屋にぶつかる

1972年ごろ、まだ、定住せずにブッシュに住んでいたころのことだ。明け方、ツォウ夫妻の小屋にライオンが突進してきた。夫のツォウは恐怖のあまり震えて意識を失った。妻はツォウのキョウダイたちの所へ行き、「わたしたちはこんな目にあった。まるでカバーのようだった」と訴えた。キョウダイたちは即座にカバーの儀礼をおこない、葉草の入った水をツォウに降り注いだ。ツォウは意識を取り戻し、回復した。

ツォウは狩りをしてはキョウダイたちに肉を分けていたのだが、キョウダイたちはその肉の分配に不満だったので、そのカバー（恨み）がツォウに入ったのである。

事例2 長き不在の息子が帰る

ツォーテベとナエコービ夫妻の息子のハケバギーサは、1982年ごろより都会に出たきり消息を絶っていた。夫妻は大変心を痛め、何度か都会まで息子を捜しに行ったが見つからなかった⁽¹¹⁾。その息子が、1993年にひょっこりと帰ってきた。両親は喜んで息子を迎え入れつつも、カバーの儀礼をおこなった。なぜなら、ハケバギーサの帰りを待ち望んで両親や親族の心は悲しみで充たされ、ツォリで汚れてくカバーの状態〉になっている。カバーの状態の両親とともに生活すると、いずれハケバギーサにカバーが入り病気や事故に遭うだろう。その予防処置として両親や親族が一堂に会し、カバーの治療をおこなった。

事例3 狩猟での事故

1995年8月、若者のトゥトゥは仲間数人で、狩猟に行った。彼は獲物を狙って槍を投げたのだが、その槍が誤ってジュブという若者に刺さってしまった。ジュブは大怪我を負ったが、町の病院に運び込まれて一命をとりとめた。この事故についての人々の解釈は次のようである。

トゥトゥは日頃、狩りで得た肉を両親や親族に分けておらず、両親は悲しんでいた。そのためにトゥトゥはカバーの状態になっていた。また、ジュブの両親はカデから 200 キロほど離れた別の集落に住んでおり、長い間息子に会っていなかった。その両親の悲しみ故にジュブはカバーの状態になっていた。カバーの状態である 2 人が一緒に狩猟に出かけたので、このような惨事がおきたのである。

この事例ではカバーの儀礼をおこなったか否かは不明である。

事例 4 出産の遅延

1994 年 12 月中旬、若い女性のゴーコは臨月に入っていたが、なかなか子どもが生まれなかった。ゴーコの出産が遅れていることについての、ゴーコの母親と兄嫁の解釈は次のようであった。

ゴーコの兄のシエホが、彼の母親のイモウトにあたるモレツァに肉を分けなかったので、モレツァに恨まれてカバーが生じた。そのカバーが妹のゴーコに入り、彼女の出産が遅れているのである。

結局、翌月の 1 月 9 日に子どもが産まれ、カバーの儀礼はおこなわれなかった。

これらの事例のように、突発的な事故や問題が起きてしまったあとの説明として、カバーが人々の口にのぼる。突発的な事故は強く人々の心を揺さぶるものであり、事例 1 のようにカバーからの回復も劇的なものである。事例 3 の事故も衝撃的な事件であったが、幸いなことに命は助かった。長期間不在だった息子が帰ってきた場合（事例 2）にもカバーの儀礼がおこなわれる。親族は彼を「切実に欲している」（菅原，1987）ので、その欲望ゆえにくツォリでよごれている状態になるという。「極端に長い不在は、人の体にある種の汚れを沈着させる。しかも、その汚れの源は、不在の人を希求する者たちの欲望なのである。」（菅原，1987）

臨月を迎えても子どもがなかなか産まれないとき（事例 4）は、難産や死産、あるいは母体の死に結びつくと考えられており、グイは出産の遅延を災難として受けとめている⁽¹²⁾。出産の遅延の原因として、彼らはツォリとカバーのどちらかを考える。ツォリは夫妻、とくに妻が以前に別の男性と性交

渉を持ったことによる。カバーは夫あるいは妻が、親族たちの恨みをかったことによって生じる。出産の遅れがツォリによるものかカバーによるものかで対処の方法（儀礼）も異なる。

カバーは、年少者の行為が年長者を苦しめ、年長者たちが〈ツォリでよげれている状態〉になることによって生起する。したがって、年少者にカバーが入って命の危険に冒されたとき、親族の年長者たちは自分たちの手の垢（ツォリ）を水で洗って、ツォリを外へ追い出そうとする。したがって、カバーのための儀礼は〈手の垢〉といわれる。

カバーを「恨み」と訳すと、アフリカに広く見られる「邪術」や「呪い」を連想させる。しかしながら、カバーは恨みや妬み全般に拡張されることがなく、あくまで、親族の年長者から年少者へ、多くの場合には親から子へ発せられるものに限定されている。

突発的な事故や急病で人が死んだ場合は「呪い」が囁かれる場合があるが、これは必ず近隣のカラハリ族あるいはツワナ族によるものとされる。私の滞在中に「落雷で子どもが死ぬ」という事故が起きたことがあるが、この事故については「子どもの父親がカラハリ族に呪いをかけられたからだ」という噂が流布していた。人を死に至らしめるような呪いはバンツー系農牧民のカラハリ族あるいはツワナ族のものであり、ブッシュマンはそのような恐ろしいものは使わないというのが、グイたち自身の主張である⁽¹³⁾。カバーは呪いではないので、カバーによって人が死んだという例はほとんどない。カバーによる被害は、危うく命を落としかけるが最終的には助かるというものであり、決して年少者を死に至らしめるものではない。被害がこの程度に限定される点が、いかにも親族の仕業であるように思われる。

カバーは親族という枠組みの中で生起するので、災厄の責任という点では加害者（年長者）と被害者（年少者）は「共犯関係」にある。事例1では被害者の妻が、災厄にあったその瞬間から「これはカバーによるものだ」と判断している。被害者の妻がキョウダイたちのところへ駆けつけたのは、彼らを責めに行ったのではなく、人を集めてカバーの儀礼をおこなってくれと懇願に行ったのであった。私は、加害者とされるキョウダイの1人に過去のこ

の事件について尋ねたことがあるが、彼は「わしがカバーを入れたのかと言われても、わしは知らない。だが、人々がカバーと言うのなら、それはカバーなのであろう」と答えた。被害者夫妻の「われわれは、肉を取りすぎている」という自責の念を、キョウダイたちが共有してやったと考えられる。

事例2では災厄の起きる前に、両親が自分たちのせいで息子に災いが起きるのを自覚している。両親は、息子を強く希求した欲望や悲しみを「手の垢」とともに発散させたいと感じ、息子は自分のせいで両親が心を痛めたことを認める。こうして、両親と息子はカバーにおいて共犯者となるのである。

事例4では、カバーは妊婦自身のせいではなく兄への恨みのせいであると、彼女の母親たちは考えている。兄のせいで妹が災厄に遭うとは理不尽な話である。また、妊婦の夫も優秀な騎馬獵のハンターであり、夫の方こそ恨みを受けそうであると、最初に私は考えた。しかし、この「診断」を下していたのは、兄の母と妻その人であった。つまり、兄シエホが、肉の分配のことで母のイモウトを怒らせているのではないかという恐れが、シエホの母と妻にはすでに共有されていたのではないか。そして、シエホの妹が初産への不安に加えて出産が遅れているのを、母のイモウトのカバーのせいであると彼女たちは考えた。被害者側の強い自責の念が、カバーという加害被害関係を発生させたのである。

4-3 治療のダンス（ヒーリング・ダンス）

グイ・ブッシュマンは、病人を回復させ、キャンプに平安と救済をもたらすためにダンスを踊る。この治療のダンスは、グイにとって重要な宗教的儀礼であるばかりでなく、すべてのブッシュマンに共通したもっとも顕著な「文化の核」（菅原，1993）である。ダンスの形式や機能については、田中（1971，1978），今村（1991）を参照されたい。ここでは「薬」についての記述にとどめる。

ヒーラーである男性の踊り手は、 $\ne k'aa$ という薬草や、ゲムスボックの角を刻んだものを病人に投げつけて失神させる。また、ヒーラーの身体から流れる汗を手でぬぐい、病人たちに振りかける。ダンスでの感きわまった状態

について「コップをとって水たまりを飲む」(菅原, 1993)という表現がある。病人だけでなく、一般の女性たちもこの治療を受けようと歌を歌いながら参加しており、女性たちは「われがちに踊り手の脛を掌でこすり、自らの頬になすりつける」(菅原, 1993) 菅原は、彼らが「水たまり」にたとえるものこそ、男性の身体から放射される「活力」または「精気」なのであろうと断じている。

IV 考 察

1 治療としての儀礼

グイ・ブッシュマンは、人間の成長段階に応じて被るとされる病気や災いへの予防、また、実際に起こってしまった事故や病気への治療として儀礼をおこなう。「儀礼」をあらわすツォーというグイ語は、「治療」「薬」が本来の意味である。グイの社会では、「治療儀礼」のように儀礼の一部として治療があるのではなく、治療行為の一部として儀礼がおこなわれる。

人類学における儀礼理論として代表的なものに、ヴァン・ジェネップとターナーの儀礼論がある。ヴァン・ジェネップ (1909, 邦訳 1977) はさまざまな文化の通過儀礼の過程を分析し、「分離」「過渡」「統合」の3段階に分けた。ターナー (1969, 邦訳 1976) は、儀礼によって生じる不連続性に注目し、「境界状態」の概念を提出した。両者の理論は、儀礼、とくに通過儀礼において、ある地位から別の地位へと移行する「境界」にこそ特別な象徴的機能があることに注目している。

グイの儀礼において、はっきりと境界の構造が読みとれるのものは、初潮儀礼と成人儀礼だけである。誕生、結婚などの通過儀礼、また、食物回避解除の儀礼 (この儀礼も通過儀礼の一種である) では、別の状態に移行してしまっただけからその状態への「事後処理」として儀礼がおこなわれる。したがって、グイにとっては儀礼とは「形式的な」けじめなのではなく、「実質的な」治療なのである。

2 葉草の比較

グイ・ブッシュマンが、治療および儀礼において利用する植物のリストを作った。全部で 50 の方名が集まったが、学名が同定された 44 種のうち 26 種が同種あるいは同属で、薬用植物として文献に報告されているものだった(表 1)。これらの植物のいくつかは、成分分析などにより薬効成分が明らかにされている(Iwu, 1995 など)。グイたちは、経験によって、あるいは他の民族からの伝播によって、鎮痛、下剤、咳止めなどに効果のある植物に関する知識を保有している。

グイの儀礼の中で、|| gâa (*Ehretia rigida*) は、罌嶺や肉食回避を解除するときの儀礼に使われる重要な葉草である。この植物はボツワナ、ナミビア、南アフリカ共和国などの南部アフリカ一帯のバンツー系民族の間で「幸運のまじない」とされており、獲物の力を弱らせるためにハンターが身につけたり、凶暴な牛をおとなしくさせるために家畜囲いの門に使ったりする(Palgrave, 1977)。歴史的にブッシュマンがバンツー系の民族より先に南部アフリカに住んでいたことは確かだが、どちらが先に考案して他方に伝えたのかは不明である。しかし、民族を越えた植物の利用方法の共通性から、儀礼においてもなんらかの影響を与え合ってきたと考えられる⁽¹⁴⁾。

3 儀礼群間の関係

通過儀礼、肉食回避、不嶺に対する儀礼、および、ツォリの儀礼のうちの「尿を混ぜ合わす儀礼」は、葉草が!gâri ìi, sîmexa, !gôö | kôa, || gâa, || gôre と共通しており、これらを黒く焼いてから剃刀で切った傷口に塗り込むという行為のパターンも共通している。また、儀礼方法が聞き取りをおこなった人によって異なることはなく、グイとガナでもほぼ一致していた。そこで、これらの儀礼群を次の儀礼群と対比させて「ブッシュマン起源」と分類する。

一方、ツォリの儀礼のうちの「くしゃみの儀礼」と「汗をかく儀礼」、および、カバーの儀礼は、儀礼の方法にヴァリエーションが多く、その中には「ヤギの血と耳を用いる」など明らかに農牧民の影響がみられるものがある。ま

た、くくしゃみ薬」のことをグイ語のほかに、ミリリョとツワナ語で言うことがあり、「汗をかく儀礼」にはグイ語での名称はなくムハーキョというツワナ語でしか呼ばれない。したがって、これらの儀礼群は、「ツワナ・カラハリ起源」であろうと推察される。

ブッシュマン起源の儀礼群は、使用する薬草によって、さらに二つに分けられる。一つは薬草に!gâri iîを用いる、初潮、結婚、ツォリの儀礼である。!gâri iîとは、「月経の木」という意味であり、女性原理が根底にある。もう一つは|| gâaを用いる、男性の成人儀礼、肉食回避、罌獵の儀礼である。|| gâaは「罌獵の薬」であると彼らは言い、男性原理を象徴している。

不獵に対する儀礼でも、弓矢獵については!gâri iîが使われているのが興味深い。月経中の女性は弓矢に触れてはいけないなど、弓矢獵のいくつかの部分は女性を排除しているが、初潮儀礼中の少女は、逆に〈弓矢の儀礼〉をおこなって狩獵を成功に導く。また、「両親の血を子どもに入れる儀礼」では、!gâri iîではなく、|| gōreを使っている。|| gōreは、|| gâaに準じて罌獵、弓矢獵、肉食回避の儀礼の薬でもある。〈弓矢の儀礼〉とく子どもの儀礼は、女性原理と男性原理が交差する場である。

4 グイの身体観

儀礼を支える物質的な要素は、薬として使われる植物と、血や尿、垢などの人間の身体から分離された物質である。

儀礼においてよりパワフルなものは、薬草よりもむしろ血や尿、汗、唾、垢、爪といった人間の身体から分離された物質である。これらの物質は、結婚のときの血を混ぜ合わす儀礼での血、肉食回避の儀礼で使われる血、汗、唾などのように「清くて」ポジティブなものであると同時に、ツォリの儀礼やカバーの儀礼で使われる血、尿、汗、垢、爪のように「よごれて」いてネガティブであるがゆえにパワーを持つという両義的存在である。

グイは、これら身体から分離された物質は皆一つの力の源から発しており、見かけは異なっても同じものであると考えている。以下は、初老の男性が語った身体からの分離物についての見解である。

人間を作るのは、男の水（精液のことをさす）と女の水だ。血と水。これらは、どちらも強いものである。すばらしい効力を持っていて、しかも強力である。だから、子どもを作ることができるのだ。（中略）血のことを、血のことをこそ水というのだ。水は血である。ここを切る。これは、赤い。これは血だ。これが陰部から出ると赤くない。男と女が寝るところに出ると、赤くない。しかし、これは血と同一のものである。水と尿と血。これらは同一のものだ。汗と唾と血と尿。これも同一のものである。どれも人間の身体から発する同一のもので、すばらしい力を持っている。グイ人はこのように考えている。だから、血も尿も唾も汗も垢も治療に使う。

彼は人間はどのようにして生まれるのかというグイの「生殖理論」と合わせて、グイの身体観について語っている。これらの分離物のパワーは、人間が誕生し、生きていくその生命の力に発しているのである。ここには、人間と生への確固たる肯定と信頼が存在している。

5 社会関係の軋轢と災い

人と人との社会関係の葛藤から生じる災いとして、ツォリとカバーをあげた。主としてツォリは性的関係の、カバーは親族における上下関係の矛盾に起因し、これらの儀礼は相補的であるといえる。しかし、カバーを発生させた年長者たちは「ツォリで汚れている」と表現するので、ツォリの方がより広範囲で基層部に位置する概念である。また、ツォリは具体的な「垢やよごれ」も意味するように、より身体レベルに近い。

一方、カバーは「若者は、親族の年長者を尊重しなければならない」というイデオロギーを災いという形で、人々に再認識させるものである。漠然と日常生活に潜むツォリと比べ、カバーはより意図的に共同体の意志が働き、被害も劇的である。

ツォリとカバーの儀礼では、体液や垢、爪が強力な治療効果を持つ。前節で述べたように、身体から分離された物質は強力な薬であるというグイの身体観がこの治療効果の基底にある。また、人々が儀礼に参加し、自分たちの尿や垢を混ぜ合わせるという行為には呪術的な意味がある。「身体から分離された物質が身体それ自体の隠喩的象徴として扱われ、それらを混じり合わせ

ることが人と人との一体化を達成するとみなされているのである。」(菅原, 1993)

さらに、子どもたちをも含めた災厄に関与する人間すべてが儀礼に参加し、自分たちの関係に矛盾が生じたことを認め合い、関係をより正しいものへ修復しようとするその行為自身に、すぐれて社会的な機能がある。グイ社会は食物から情報、人間関係までをも共有する社会なのである。

6 災因論と社会構造

呪詛や邪術については、アフリカの多くの民族誌で記述されてきた。このような「呪い」は、持たざるものから持てるものへの「妬み」に起因する。掛谷はアフリカの農耕民社会では、「制度化された妬み」として呪いが機能し、呪いは「食物の平均化」に役立っていると指摘した(掛谷, 1983)。ケニアのテソ族(ナイロート系牧畜民)の災因論の体系を分析した長島(1987)も、邪術はより恵まれた者を自分と同じレベルまで引き下げのために行使されると記述している。

長島によると、テソ社会における災厄は呪詛、邪術、死霊によってもたらされ、そのうちの死に至る病のほとんどが、邪術など被害者の側に責任のない不当な攻撃のせいにされている。さらに、彼らのコスモロジーは、神との関係において倫理的責任感が弱く、また「運命観」が欠如している。したがって、テソにとって個々の災厄は、運命などによって決定されているわけではなく、しかも自分にはまったく責任がないという、「楽天主義」で「無責任」な論理が彼らの災因論の中心にあるという。

一方、ケニアのナイロート系半農半牧畜民チャムスは、病気をはじめ、不幸の責任を他者に求めず、運命論的に不幸を受け入れる傾向が強い(河合, 1994)。チャムスにおいては病気とは「カミの病」と認知されているものが多く、社会関係の歪みによってもたらされる呪詛や邪術とは別のものと位置づけられている。したがって、病気には詳細な身体の観察と、薬草などに関する莫大な知識を動員して治療をおこなう。

グイにとっての災厄の大半は運命論的ではないが、死についてだけは「そ

の人の生に神が同意しなかった」と運命として受けとめる。また、数々の怪我や病気について、「儀礼中のタブーを破って神を怒らせたから」と神を使った表現を用いることがあるが、これらの「責任」は災難に遭った人自身にあるとされる⁽¹⁵⁾。社会関係の軋轢から生じる「カバー」は恨みや妬みの感情に近いが、これは親族の枠組みの中に限定されており、人を死に追いやるものではない。また、カバーにおける災厄の「責任」は加害者と被害者が共有するという構造になっている。

グイの儀礼全般を見ると、干ばつなどの自然現象における災害、身体の不調、社会関係の葛藤などの諸問題に対し、薬草や呪術でもって積極的に操作しようとはしない傾向がある。むしろ、自らの行動を律することによって災厄を未然に妨げようとしている。雨が降り、自然が動植物で満たされることを祈って、初潮儀礼中の少女は行動規制をおこなう。両親はわが子の成長のために、ある動物の肉を食べない。恨みについても、むしろ被害者の方が責任は自分にあると自覚する。妬みによって他人を引きずりおろすのではなく、自らの行動を抑制することによって、さまざまな問題の解決をはかっているのである。

カバーの儀礼は、ツワナ・カラハリ起源の可能性が高いことは先述したとおりである。そのような「呪術」に近いものを他民族から導入しながら、実際の運用は自分たちの社会の価値観に合わせて変容させる。このようなことが、ブッシュマンとツワナやカラハリとの文化接触の過程でおきたのではないだろうか。文化変容の動態を明らかにするために、グイの近隣民族の儀礼との比較研究を次の課題としたい。

謝辞

本稿は名古屋学院大学経済学部研究奨励金（1997年度）の助成による研究成果の一部である。本研究のもとになっている資料の多くは、文部省科学研究費(国際学術研究)「アフリカ伝統社会の持続と変容に関する生態人類学的研究」(代表者・田中二郎)、「変容するカラハリ狩猟採集民サンの生態と社会に関する人類学的研究」(代表者・菅原和孝)、「カラハリ砂漠とその植生移行

帯における民族多様性に関する生態人類学的研究」(代表者・田中二郎)の交付を受けて収集された。隊長の田中二郎博士(京都大学教授)をはじめ、調査隊の皆さんには貴重な情報と協力をいただいた。とくに、菅原和孝博士(京都大学教授)からは、貴重なコメントと未発表の情報をいただいた。これらの方々に感謝の意を捧げたい。

註

- (1) 調査対象のセントラル・ブッシュマンは、グイとガナの二つの言語集団からなる。彼らの言語の違いは方言程度で、彼らどうしは十分に言葉が通じ合い、また、通婚も互いにし合う。
- (2) 植物のグイ名の収集と記載などは、すべて私がおこなった。したがって、表記に誤りがあったとしたら、それはすべて私の責任である。
- (3) グイの親族名称では、父、または母を共有する兄弟姉妹のほか、父母の同性の兄弟姉妹の子どもたち(人類学でいう平行イトコ)も、同じカテゴリーに入る。これらをここではキョウダイとする。また、父母と同性で父母より年長のキョウダイ、父母と異性のキョウダイは、オジ、オバといわれる。また、このオジと祖父、オバと祖母は親族名称においては同一である。父母と同性で父母より年少のキョウダイは、「小さい父」「小さい母」という。グイの親族名称については、大野(Ono, 1996)の詳細な研究がある。本稿では、オバ、キョウダイ、イモウトなど片仮名で記したものは、グイの親族カテゴリーを指す。文脈の中で、実際に意味するものが日本語のカテゴリーと一致するときは、母、兄など漢字で記した。
- (4) 私の聞き取り調査によると、男性の成人儀礼は1930年代後半から1960年代まで2回しかおこなわれていない。2回目の成人儀礼について、年輩の男性19人に成人儀礼に参加したことがあるか否かを聞いたところ、11人は参加したことがあるが、8人は参加していなかった。理由は、「儀礼が苦痛」「儀礼の期間中、肉食回避しなければならないのが嫌だった」などであった。成人儀礼に参加しなければ、儀礼をおこなった正確な場所を知らず、その場所を横切って足が萎えてしまうという災難に遭うことがある。
- (5) 私はこのうなり板を「ホローハ」と聞いているが、菅原(1996)は、男性の成人儀礼の名称を「ホローハ」と報告している。うなり板は「|| gaa-iiと呼ばれ、(中略)木部は| gaaなどのありふれた木で作るが、わざと|| gaaと言ひ替えられる(菅原, 1995)。」
- (6) 私の聞き取り調査によると、ゲムスボック、オオミミギツネ、セグロジャッカルは3種は、ブッシュで集団生活をしている1カ月の間食べない。集団生活を解いた後も数カ月間は、スティーンボック、ハーテビーストを食べてはいけな。さらに、ワイルドキャットは、老齢に達しある儀礼を施してから食べなければならない。成人儀礼に参加しなかった男性は、これらの肉食回避をおこなう必要がない。
- (7) 4～5歳の子どもが、自分の小屋から20メートルほど離れた隣の小屋へ遊びに行く途

- 中に迷子になり、一晩で寒さで死んだという事故が1960年頃実際に起こった。
- (8) 食生活に重要な野性メロンである qāā の根を, nāa という。nān は非常に苦く, 食べられない。しかし, 子どもに離乳を促すとき (現在は2歳前後) は, この nān の汁を乳首に塗って子どもが乳を吸えなくする。
 - (9) ツォリとカバーという2つの概念は菅原 (1993) によって初めて報告された。
 - (10) さらに, 尿と汗を同時に使う儀礼が菅原 (1993) によって報告されている。菅原自身に再度詳しく聞いたところによると, 以下のようである。尿と葉を混ぜ合わせたものに, 熱く焼いた「黒い石」を投げ入れて湯気を出させる。参与者たちは毛布を被って湯気を浴び, 多量に汗をかく。「黒い石」とは, アリ (Nonaka (1996) によると, winged ant) の塚である。
 - (11) 1985年1月には, ラジオで同名の男性が都会で殺人事件の被害者になったというニュースが流れ, ナエコービはてっきり自分の息子が殺されたのだと信じ泣きくれた (菅原, 私信)。
 - (12) 子どもが逆子で生まれると, カバーが原因とされることもある (菅原, 私信)。また, 逆子や双子については小屋を子宮と見立てる特別の儀礼をおこなうことがある。
 - (13) グイたちの「呪詛」に近いものは, 言葉で「おまえは, ライオンに遭うだろう」などと言って脅かすことであり, これすらも非常な悪事とみなされる。
 - (14) 歴史的にグイとガナ・ブッシュマンは, ツワナ族やカラハリ族と接触し, 文化的な影響を及ぼし合ってきたことが, 大崎 (1996) の研究などから明らかになってきている。
 - (15) カバーが生起する機構について, 「親族の悲しみを, 空から神が見ていて, 神の心も痛む。そこで神は, 若者を病気にしてしまう」というように, 親族と若者の相互作用の間に神の存在を加えることもある。神を媒介にしたイディオムは, 母親が妊娠すると末子に母乳を与えなくなることへの説明にも使われる (菅原, 1997)。しかし, どちらの場合も神を媒介にしなくても説明できる。

引用文献

- Iwu, M. M. 1993 *Handbook of African Medicinal Plant*. CRC Press, U. S.
- 池谷和信 1989「カラハリ中部・サンの狩猟活動——犬獺を中心にして」, 『季刊人類学』20 (4): 284-332
- 今村 薫 1991「サンの日常と歌」, 田中・掛合編『ヒトの自然誌』, 平凡社, pp. 91-105
- 今村 薫 1993「サンの協同と分配——女性の生業活動の視点から」, 『アフリカ研究』42: 1-25
- 掛谷 誠 1983『「妬み」の生態人類学——アフリカの事例を中心に』, 大塚柳太郎編『現代の人類学1, 生態人類学』, 至文堂, pp. 229-241
- 河合香吏 1994「ケニアの半農半牧民チャムスの自家治療における民族医学」, 『京都大学博士論文』
- 長島信弘 1987『死と病の民族誌』, 岩波書店

- 中川 裕 1993 「グイ語調査初期報告」, 『アジア・アフリカ文法研究』 22 : 55-92
- Nonaka, K. 1996 Ethnoentomology of the Central Kalahari San. *African Study Monographs Supplementary Issue* 22 : 29-46
- Ono, H. 1996 An ethnosemantic analysis of Gui relationship terminology. *African Study Monographs Supplementary Issue* 22 : 125-144
- Osaki, M. 1984 The social influence of change in hunting technique among the Central Kalahari Hunter-gatherers. *African Study Monographs*, 5 : 49-62
- Osaki, M. 1990 The influence of sedentism on sharing among the Central Kalahari hunter-gatherers. *African Study Monographs Supplementary Issue* 12 : 59-87
- 大崎雅一 1996 「歴史的観点から見た | Gui と || Gana ブッシュマンの現状——セントラル・カラハリの事例より」, 『民族学研究』 61 (2) : 263-276
- Palgrave, K. C. 1977 *Trees of Southern Africa*. Struik Publishers, Cape Town
- Silberbauer, G. B. 1963 Marriage and Girl's Puberty Ceremony. *Africa* vol. 33
- Silberbauer, G. B. 1981 *Hunter and Habitat in the Central Kalahari Desert*. Cambridge Univ. Press
- 菅原和孝 1987 「セントラル・カラハリ・サンにおける訪問者と居住者の社会関係と対面相互行為——!Koi!kom 定住地での訪問活動の観察より」, 『国立民族学博物館研究報告』 12 (4) : 1030-1111
- 菅原和孝 1993 『身体の人類学——カラハリ狩猟採集民グウィの日常行動』, 河出書房新社
- 菅原和孝 1994 「ひとりのグウィの女が死んだ——セントラル・サンにおける『死のコンテキスト』」, 井上・祖田・福井編 『文化の地平線——人類学からの挑戦』, 世界思想社, pp. 393-413
- 菅原和孝 1995 「グイ・ブッシュマンの失われた儀式的ホローハ」 『日本民族学会第29回研究大会研究発表抄録』, p. 71
- 菅原和孝 1996 「狩猟採集民の宗教的世界と自然観——アフリカ南部グイ・ブッシュマンの社会より」, 有福孝岳編著『現代における人間と宗教——何故に人間は宗教を求めるのか』, 京都大学学術出版会, pp. 29-59
- 菅原和孝 1997 「記憶装置としての名前——セントラル・サン (| Gui と || Gana) における個人名の民族誌」, 『国立民族学博物館研究報告』 22 (1) : 1-92
- 田中二郎 1971 『ブッシュマン——生態人類学的研究』, 思索社
- 田中二郎 1978 『砂漠の狩人——人類始源の姿を求めて』, 中央公論社
- Tanaka, J. 1980 *The San, Hunter-Gatherers of the Kalahari : A Study in Ecological Anthropology*, Univ. of Tokyo Press, Tokyo
- Tanaka, J. 1987 The recent changes in the life and society of the Central Kalahari San. *African Study Monographs*, 7 : 37-51
- ターナー, V・W 1976 『儀礼の過程』 富倉光雄訳, 思索社
- ヴァン・ジェネップ, A 1977 『通過儀礼』 秋山他訳, 思索社

付表 個々の治療および儀礼の方法

A 通過儀礼にともなう治療

A-1 初潮儀礼

A-1-1 〈食べさせる〉

- ①オバが saasa を嚙んでから唾を少女に吐きかける
- ②少女の利き手の拇指丘に、剃刀で二本の傷をつける。
- ③傷口に〈食べ薬〉（粉にした munnam tsôo と ≠nân ≠kè を混ぜた物。成長促進の作用がある）をのせる。
- ④オバが少女の手首を握り、傷口にのった〈食べ薬〉を少女に食べさせる。

A-1-2 〈垢をこすって小屋から出す〉

- ① || nan の種を粉にしたものを、身体に付けて垢と一緒にこすり落とす。
- ②!gôð | kôa, !gâri ì または sîmexa を細かくすり潰しながら混ぜて薬をつくる。
- ③少女の眉間、胸の中心、両肩先、両肘、背中、腰、へその両側、両膝に剃刀で傷をつける。
- ④眉間、胸、背中、腰の傷口に②の薬をいれる。
- ⑤肩、肘、へその両側、膝の傷口に、〈食べ薬〉をのせる。
- ⑥〈食べ薬〉を口にふくませて、その粉を、肩、肘、へその両側、膝、胸に吹きかける。肩、肘、へその下、膝に〈食べ薬〉を吹きかけるのは、体の成長を願い、胸に吹きかけるのは、心が豊かになることを祈っているからだという。
- ⑦その後、傷口が痛めば、エランド（大型のレイヨウ）の脂肪で作った薬を塗り付ける。

A-1-3 〈胃と肝臓の治療〉

- ①!gôð | kôa, !gâri ì または sîmexa をすり潰す。
- ②少女のオバが若者たちの下顎と胃のところを剃刀で傷つける。
- ③少女が傷口に①の薬を塗り込む。
- ④少女が自分の唾液を傷口に塗り込む。

- ⑤少女が若者たちに〈食べ薬〉を食べさせる。

A-2 結婚の儀礼

男性、または女性のオバが執り行う。

- ①男性（新郎）と女性（新婦）の、眉間、胸の中心部、両肩先、両肘、両膝、背中、腰、へその下（男性の場合）、へその両側（女性の場合）に、剃刀で傷をつける。
- ②傷口からにじみ出ている血を取り、男性の血を女性の傷口へ、女性の血を男性の傷口へ、同じ傷口の場所へ塗り込む。
- ③男女の、眉間、胸、背中、腰の傷口に、!gõð | kòà, !gâri ì または sîmexa を入れる。
- ④男女の、肩、肘、へそ、膝の傷口に、〈食べ薬〉をのせる。
- ⑤〈食べ薬〉を口にふくませて、その粉を、男女の肩、肘、へそ、膝、胸に吹きかける。
- ⑥男性の手のひらに、〈食べ薬〉をのせる。彼は女性の口に〈食べ薬〉を放り込むように入れて食べさせる。
- ⑦女性の手のひらに、〈食べ薬〉をのせ、女性が男性に食べさせる。
(男性と女性の順序は、どちらが先でもよい)

A-3 子どもに両親の血を混ぜる儀礼

- ①父親の匂いを子どもにかがせて、子どもを驚かせないようにする。
- ②両親と、子どもの、胸、両肩先、両肘、両膝、背中、腰、へその下（男性の場合）、へその両側（女性の場合）を剃刀で傷つける。
- ③傷口から滲み出している両親の血を、子どもの傷口の同じ場所に入れる。
- ④|| gõre と ≠nân ≠kè を混ぜたものを、傷口に塗り込む。

B 肉食回避を解除するときの儀礼

B-1 初潮を迎えた少女がおこなう肉食回避

B-1-1 ゲムスボック

- ①ゲムスボックの蹄を火であぶり、焼けた毛と蹄の表面の汚れをナイフで削り落とす。
- ②毛と蹄の垢と、腸の中の糞と、焼いた \parallel gâa または \parallel göre を混ぜ合わせる。
- ③へその両側の腹部に 2～3 本ずつ、剃刀で切り傷をつけ、②の薬をぬる。

B-1-2 スティーンボック

- ①スティーンボックの体毛と、腸の中の糞と、 \parallel gâa または \parallel göre を混ぜ合わせる。
- ②へその両側の腹部に 2～3 本ずつ、剃刀で切り傷をつけ、①の薬をぬる。

B-1-3 ハーテビースト

ハーテビーストの治療方法は、基本的にはスティーンボックと同じ。薬草として、 \parallel gâa または \parallel göre のほかに、 \neq xâri を加えることもある。

B-1-4 トビウサギ

- ① $|$ kôë, !nân, \neq xâri, \parallel gâa または \parallel göre の薬草を焼いてすりつぶし、トビウサギの腸の中の糞と混ぜ合わせる。
- ②へその両側の腹部に 2～3 本ずつ、剃刀で切り傷をつけ、①の薬をぬる。

B-1-5 ヤマアラシ

- ①ヤマアラシの肉に、 \neq xâri の表皮を混ぜて食べる。
- ②施術者が \neq xâri を咬み、治療を受ける者も同様に根を咬み、施術者の手に両者の唾液を垂らして混ぜ合わせる。
- ③その唾液を施術者が、治療を受ける者の胃のあたりに、呪文「 \neq de pu \neq de pu \neq k'ana (意味は不明)」を唱えながら塗り付ける。以下の方法も用いられる。
- ④ヤマアラシのトゲを焼いたものと、 \neq xâri を焼いたものをすり潰して混ぜ合わせる。
- ⑤治療を受ける人の腹部に剃刀で傷をつけ、傷口に①の薬を塗り込む。

B-2 子どもに対して両親がおこなう肉食回避

B-2-1 ゲムスボック

母親が子どもに対して

ゲムスボックの肉を煮たスープは、母乳の出を良くするというので、出産直後の産婦が好んで口にする。

- ①肉と蹄(蹄の表面の毛や垢に薬効がある)を一緒にして煮る。その肉とスープを母親が食べる。子どもには食べさせないが、母親の母乳から、ゲムスボックの肉が子どもの体に入る。
- ②母親が || gâa または || gōre を咬んで、自分の唾液を子どもの口の中に注ぎ込む。
- ③母親が自分の手のひらに母乳を絞り、薬木の混ざった唾液も垂らして混ぜ合わせ、これを子どもの体に塗り付ける。とくに、左右の脇腹から中心へ、正中線沿いにみぞおちから下へと撫でさする。

父親が子どもに対して

子どもが生後1カ月くらいになると、父親はゲムスボックの肉を食べてもよい。

- ①父親は肉を食べてから、|| gâa または || gōre を咬んで、自分の唾液を子どもの口の中に注ぎ込む。
- ②薬の混ざった唾液を、子どもの胃のあたりの左右から中心へ、上から下へ塗り付ける。

B-2-2 スティーンボック

母親が子どもに対して

子どもが歩けるようになると、母と子はスティーンボックの肉を食べてもよい。

- ①スティーンボックの体毛と、腸の中の糞と、|| gâa または || gōre を混ぜ合わせる。
- ②子どものへその両側の腹部に2～3本ずつ、剃刀で切り傷をつけ、①の薬をぬる。

父親が子どもに対して

子どもが這うようになると、父親はスティーンボックの肉を食べてもよい。

儀礼の方法はゲムスボックと同じ。

B-2-3 ハーテビースト

ハーテビーストを両親と子どもが食べ始める時期、および治療方法は、基本的にはスティーンボックと同じ。薬草として、 \parallel gâa または \parallel gōre のほかに、 \neq xâri を加えることもある。

B-2-4 トビウサギ

トビウサギとヤマアラシは、子どもが1～2歳になるまで両親が肉食回避する傾向が強い。

- ① | kôê, !nân, \neq xâri, \parallel gâa または \parallel gōre の薬草を生のまま咬む。
- ②薬の混ざった唾液を、子どもの胃のあたりの左右から中心へ、上から下へ塗り付ける。

B-2-5 ヤマアラシ

母親が子どもに対して

- ①ヤマアラシのトゲを焼いたものと、 \neq xâri を焼いたものをすり潰して混ぜ合わせる。
- ②治療を受ける人の腹部に剃刀で傷をつけ、傷口に①の薬を塗り込む。

父親から子どもに対して、あるいは、母親から子どもに対して

- ① \neq xari を咬み、その唾液を子どもの口に注ぎ込む。
- ②薬の混ざった唾液を、子どもの胃のあたりの左右から中心へ、上から下へ塗り付ける。このとき、「 \neq de pu \neq de pu \neq k'ana」と何度も呪文を唱える。

B-3 老人の肉

ゲムスボックの腸は、14～15歳にならないと食べられないが、治療の必要はない。ハーテビーストの骨髓は、20歳をすぎたあたりから食べてもよい。薬草はとくに使わないが、年長者が手にとって若者に与える。クーズーの骨髓

は、30歳を越えたあたりで食べ始める。この治療を行わずに骨髓を食べると、足が痛み歩けなくなる。治療は年長の男性がおこなう。

- ①クーズーの四肢から骨髓を出したときの骨片で、若者の左右の大腿、下腿の外側に、3～4本の傷をつける。
- ②傷口に、骨髓をぬりつける。
- ③骨髓と肉を混ぜて鍋で煮てから、白でつく。
- ④③に || kām̥ts'ā の根を混ぜる。
- ⑤④を年長者が自分の手に盛って唾をかける。若者も年長者の手に盛られた肉に唾を吐きかける。
- ⑥④を若者は年長者の手から食べる。
- ⑦若者が、自分の手で食べる。

C 不猟に対する儀礼

C-1 畏猟の儀礼

原則として妻が夫に施す。以前は、猟での成功を祈願して何十回とこの儀礼を繰り返したものだという。50歳を越えた男性は、眉間にきれいな青色の入れ墨を入れているが、この入れ墨のことを「畏猟の薬」「弓矢猟の薬」という。

- ① || gāa または || gōre, ≠xāri の根を焼いて、炭のようにする。
- ②ブッシュダイカー、または、スティーンボックの蹄を焼いてから、①の薬木とともにナイフで削る。
- ③②にブッシュダイカー、または、スティーンボックの糞を混ぜてすり潰す。
- ④狩人の眉間、胸、上腕の数カ所を剃刀で傷つけ、③をいれる。

C-2 弓矢猟の儀礼

弓矢猟にも儀礼をおこなう。以下の3通りの方法がある。妻、あるいはキャンプの年長者がおこなう。

C-2-1

この儀礼は、「動物の心を眠らせ、動物が人間を発見できなくする」という。

- ① || gōre, !gōð | kōa, !gāri i̯ または sîmexa の根を焼き、すりつぶす。

- ②ゲムスボック、エランド、クーズー、キリンなどの大型獣の心臓にある臍を焼く。
- ③狩人の眉間、胸、肩、肘、前腕、上腕に剃刀で傷つける。
- ④①と②を混ぜ合わせたものを傷口に入れる。

C-2-2

施術者が $\neq\delta m \neq\delta m$ というキノコを、狩人の眉間、胸、腕、彼の弓に軽く押しつけて、キノコの胞子をまぶす。彼らは胞子のことを「煙」と表現しており、「この煙によって動物は人間の姿が見えなくなり、人間は獲物に近づくことができる」

C-2-3

施術者が $\neq\delta m \neq\delta m$ と | kðro を噛みしめてから、唾を狩人の眉間、胸、腕に吐きかける。このとき、施術者は以下のように唱える。「どうしたのだ。おまえは毎日動物を見つけるのに、動物が先におまえを発見して、おまえは動物を射ることができない。動物の心を眠らせよう。動物の目をつぶらせよう。」

C-3 犬の儀礼

グイ・ブッシュマンは犬を飼っており、槍獵や罟獵に犬を連れていく。以前は獲物をよく追いかけて咬みついた犬が、突然動物を怖がるようになると、以下の儀礼を施す。この犬のための薬を !nhôe という。

- ①ゲムスボックの蹄の間にある、独特の匂いを放つ「垢」をこそげ取る。
- ②ゲムスボックの蹄を焼き、表面の毛と垢を削り取る。
- ③オオミミギツネの前足を焼き、焦げた毛を削り取る。
- ④ || qaru (リカオンという意味の薬木) の根を焼いてすりつぶす。
- ⑤以上の4種類のものを犬の餌に混ぜて犬に食べさせる。

C-4 狩獵と月経のタブー

月経中の女性は、自分の火で肉を料理してはいけない。このタブーをおかすと、彼女の夫は狩獵に成功しなくなる。夫の槍や矢が獲物に命中しても、獲物は血を流しながら平気で逃げてしまうからだ。妻がおかしたタブーにより、

「夫の腕が死んでしまって」不癒の状態が続くと、以下の儀礼をおこなう。

- ①妻が火をおこした炉の灰と!gâri iîを混ぜ合わせる。
- ②妻以外の人、夫の肩間、胸、腕に剃刀で傷をつけ、①を塗り込む。

D ツォリの治療

D-1 くくしゃみの儀礼

ツォリがくしゃみとともに身体の外に出ることによって病から回復する。くしゃみがなかなか出ないときは、病がそれだけ重いという。

- ①男性の右手親指と右足親指の爪をナイフで削る。
- ②女性の左手親指と左足親指の爪をナイフで削る。
- ③ | qðne kx'ai を削る。
- ④①と②と③を混ぜ合わせてくくしゃみ薬を作る。それを女性が男性の手の甲の、右手親指の付け根に乗せる。
- ⑤男性は、まず、西に向かってその薬を吹き飛ばす。次に再び女性に薬を乗せてもらって、東に向かって吹き飛ばす。もう一度、女性が男性の右手に薬をのせて、男性がそれを鼻で吸い込んで、くしゃみをする。
- ⑥女性の左手の甲の親指付け根に、男性が薬に乗せる。女性がまず西に、次に東に薬を吹き飛ばし、最後に鼻で吸ってくしゃみをする。
- ⑦二人でくしゃみをして治療が完了する。

D-2 汗をかく儀礼

婚外の性交渉を持った男女および、彼らの配偶者が参加しておこなう。全員が汗をかき、ツォリが汗とともに体外に出て行くことによって回復するという。

- ①薬草（名称不詳）と、エランドの脂肪を混ぜて丸める。
- ②①を焚き火の中に入れて焼くと煙が出る。
- ③全員が焚き火を囲み、毛布をすっぽり被る。
- ④煙が毛布の中に充満し、人々は汗をかく。

D-3 「尿を混ぜ合わせる」

- ①大人全員の尿を1箇所に集める。
- ②尿の中に!gòo | kòà, !gâri ìi または sîmexa と〈食べ薬〉を混ぜる。
- ③大人全員の両肘, 両肩先, 胸, 背中, 腰, へその下, 両膝を剃刀で傷つける。
- ④大人全員が, 傷口の血を②の尿の中に入れる。
- ⑤尿と血と薬木の混ざったものを大人全員の傷口に塗り込む。
- ⑥子ども全員の両肘, 両肩先, 胸, 背中, 腰, へその下, 両膝を剃刀で傷つける。
- ⑦子ども全員の傷口に④の尿と血と薬木の混ざったものを塗り込む。
- ⑧子ども全員の傷口に!gòò | kòà と!gâri ìi に, 〈食べ薬〉を混ぜた粉を塗る。

D' 妊娠している夫妻による病への儀礼

妊娠している女性とその夫の周囲には, ある種の汚れが漂っているという。その汚れのことをソム(som)という。ソムを持った夫婦がとくに病人を訪問すると, 病人は病気がひどくなる。ソムは午前中は夫婦の西に, 午後には夫婦の東にあるので, 妊婦とその夫が病人を訪ねるときは, 午前中は西から午後は東から病人の小屋へ近づかなくてはならない。夫婦がこれを怠って病人の病が重くなると, 以下の儀礼をおこなう。

- ①ソムを持った男女の身体(場所は不明)を剃刀で切って血を出す。
- ②男女の血と, エランドの脂肪と, qhaba を混ぜて炭火の上に置く。
- ③②を焚き火の中に入れて焼くと煙が出る。
- ④病人が炭火ごと, 毛布をすっぽり被る。
- ⑤煙が毛布の中に充満し, 病人は煙を吸い込み汗をかく。

この儀礼に関しては, 儀礼の種類と方法についてのインタビューで得ただけで, 実際におこったという事例は得ていない。また, 女性の生活誌や個人史を聞き集めた中にも, 妊娠中の女性のタブーはとくになかった。ただし, 菅原の著書(1993)には「妊婦の手は汚れている」という事例が載っている。

E カバーの治療

カバーに対する治療は〈手の垢〉という。人々の手の垢を治療に使うからである。親族の誰かが不在の時は、その人の服の襟に付いた垢で代用させる。

- ① qhaba の根を細かく刻み、水に入れる。
- ② カバーにかかった人の親族全員が、①の薬草と水が入ったの容器に手を浸して〈手の垢〉をいれる。
- ③ カバーにかかった人を真ん中に立たせて、親族で取り囲む。
- ④ 親族が薬草と手の垢が溶け込んだ水を、カバーにかかった人に振りかける。
- ⑤ 水を振りかけるとき、以下のように唱える。「出ていけ、カバーよ。私たちはカバーの状態である。父のカバーよ、出ていけ。母のカバーよ、出ていけ。」

表 1 儀礼や治療に使われる植物リスト

方名	学名	科名	用途	利用部	利用方法
1	lgari ìi,	<i>Pavonia clanthrata</i>	初潮, 結婚, ツォリ 弓矢猟	根	A
2	símexa	<i>Hermbsstaedtia linearis</i>	死者のけがれ 初潮, 結婚, ツォリ 弓矢猟	根	A
☆3	lgõõ kòa	<i>Cassia binesii</i>	豊作祈願 初潮, 結婚, ツォリ	根	A
4	saasa	未同定	初潮	根	浸出液を烟にまく
5	munnamu tsóo	<i>Sisyrindite spartea</i>	初潮, 結婚, ツォリ	全体	噛んで唾を吐きかける
★6	#nàn ≠ kè	<i>Baulinia petersiana</i>	胃痛	根	C
☆7	qari	<i>Acacia nebrounii</i>	初潮, 結婚, ツォリ	豆	B
8	lk'áo	<i>Stipagrostis sp.</i>	初潮	全体	C
☆9	kôro	<i>Commiphora mollis</i>	男性の成人儀礼 弓矢猟	全体	儀礼道具 儀礼道具 儀礼道具
10	góre	<i>Aptosimum albomarginatum</i>	歯痛 畏猟, 弓矢猟 肉食回避	葉 葉	B B
★11	gáa	<i>Ehretia rigida</i>	乳児の儀礼 畏猟, 肉食回避 幸運	根 根 根の皮 根	A A A, B D
12	qaru	未同定	男性の成人儀礼 犬猟における犬	根 全体	A 犬に食べさせる

☆33	gâm ca ʔii	<i>Jatropha erythropoda</i>	Euphorbiaceae	初潮後の弓矢の儀礼 血尿*3	根	Jを弓矢に塗る
34	k'aagubo	<i>Dipadi sp.</i>	Liliaceae	根	根	煎じて飲む
☆35	nuu koe	<i>Heliotropium stendneri</i>	Boraginaceae	外傷, 陰部の疾患	根	煎じたものを塗る
★36	qx'aro	<i>Ziziphus mucronata</i>	Rhamnaceae	腹痛	根	煎じて飲む
☆37	qām	<i>Cassia italica</i>	Leguminosae	血尿*3	根	煎じて飲む
38	txoo xo tsōo	<i>Hernstaedtia scabra</i>	Amaranthaceae	後産をおろす	根	B
39	cōbexa	<i>Ipomoea adenoides</i>	Convolvulaceae	腹痛, 胃痛	根	煎じて飲む
☆40	k'āa k'ana	<i>Monsonia angustifolia</i>	Geraniaceae	頭痛, 腰痛	根	K
☆41	≠káu ca ≠kāba	<i>Harpagophytum procumbens</i>	Pedaliaceae	鎮痛	根	煎じて飲む
☆42	≠nai ≠na tsāa	<i>Solanum panduriforme</i>	Solanaceae	鎮痛	根	煎じて飲む
☆43	'gae ku kere	<i>Indigofera flavicans</i>	Leguminosae	関節痛	果実	汁を傷に塗る
44	nhāa	<i>Hemandia tomentosa</i>	Hemandiaceae	外傷	果実	汁を患部に塗る
★45	nōne	<i>Boscia albitrunca</i>	Capparidaceae	皮膚病	全体	L
46	nān	<i>Citrus lanatus</i>	Cucubitaceae	皮膚病	葉	L
47	≠koō ≠kono tsāa	<i>Hemizygia bracteosa</i>	Labiatae	体の衛生	種	M
48	khuuts'i	<i>Terfezia sp.</i>	Terfeziaceae	蚊避け	全体	枕元に置く(芳香)
49	'gua ts'a kx'áo	<i>Protasparagus nelsii</i>	Smilacaceae	毒消し	全体	N
50	koō qan	<i>Indigofera bainesii</i>	Leguminosae	矢毒補強*1	根	絞り汁を矢毒に混入

☆は異種同属が, ★は同種が薬用植物として文献 (Iwu, 1993; Palgrave, 1977) に載っていたもの。
植物の同定は南アフリカ共和国国立植物園による。

用途の注

* 1 矢毒は甲虫 (*Diamphidia simplex*) の幼虫からつくるが, これらは, 矢毒をさらに強力にするために混入する。

* 2 親を亡くして気が変になった子どもに, この植物を噛ませて気を鎮めさせる。

* 3 月経中の女性との性交はタブーである。もし, このタブーを犯すと男性から血尿がでると信じられている。治療に使う植物の根

は赤い。

使用方法

- A 黒く焼いてからすりつぶしたものを、剃刀でつけた傷口に塗り込む。
- B 噛みしめて、植物の汁を吸う。
- C 乾燥させた munnam tsôo と #nân #kè の豆を杵でついて粉にし、「食べ薬」は子どもの発育を促すと考えられており、初潮儀礼や若い男女の結婚、ツォリにおいて子どもを治療する儀礼で、「食べ薬」を傷口に塗り込んだり食べたりする。
- D 日常的に、子どもに食べさせることもある。
- E 根の皮を刻んでエランソドの脂肪と混ぜたものを、舌先、眉間、あごに塗る。こうすれば運が強くなる。
- F 肉と一緒に杵でついて食べる。
- G 黒く焼いてからすりつぶした粉を、吸い込んで「くしゃみ」をする。
- H 刻んで水に浸した浸出液を、病人にふりかける。また、その液を飲む。
- I 黒く焼いてからすりつぶした粉を、臍の緒が落ちたばかりの子どもの臍に塗り込む。
- J ダンスの呪術医が、刻んだものを人々に投げつけて、トランスの状態にさせる。根は赤い。
- K 刻んだものをエランソドの脂肪と混ぜ合わせ、| xáa xo という塗り薬をつくる。| xáa xo は化粧品のように身体に塗っても良い。この植物は赤くて良い香りがする。
- L 胃痛、筋肉痛など痛む箇所を剃刀で切る。薬草を杵でついてペースト状になったものを、傷口に塗り込む。
- M | nhàa と | nõne の葉を入れて煮たさせた湯の蒸気を患部にあてる。
- N 杵でついて粉にした種を体にまぶして垢と一緒に落とす。儀礼のときにも、日常的な衛生としてもおこなう。矢毒が誤って、人間の傷口などに入ったときに使う。乾燥させて杵でついた粉を、矢毒のついた部分に塗る。